

I-dentity ではなく We-dentity *

大平具彦

1. 「養老天命反転地」でのアラカワの実験授業

ランボーは「<私>とはひとつの他者である」と語ったが、アラカワにとっては、「私」なるものは存在しない。というかむしろ、日本の詩人である宮沢賢治の「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です」¹⁾ という表現にあるように、アラカワにとって「私」は、「現象」としてあらゆるところに存在する。

アラカワに特有なこの「私」については、次のエピソードが大変に示唆に富む。NHKのある番組²⁾で、小学生を連れて自らの制作による「養老天命反転地」を訪れた荒川は、その公園の斜面を駆け下りてみせながら、生徒たちに次のように語りかける。

「滑って転ぶ”ってどういうことか知ってるか？ 誰かわかるやついるか？ きみのいちばん大切なものが外に出ていっちゃうんだ。じゃあやってみよう。（斜面を駆け下りながら）あああああ！ って、ここに出てきちゃったんだよ、外側に」

「いいか、重心を崩すということは、僕のいちばん大切なものが外に出ていっちゃうんだよ。[……]ここに、ほら。外に出ていった僕と話しちゃうんだよ」

「この身体の新しい使い方を覚えよう、この身体の中の使い方を。わかる？」³⁾（下線部、大平）

アラカワが奇妙な声を上げながら斜面を駆け下りてゆく姿は何ともユーモラスではあるが、しかし彼は実に真剣そのものである。それもそうだろう、何と彼は、重力を破るという途轍もない実験授業を小学生に行なっているのである。何気なく言われているが、「重心を崩す」ということは、僕のいちばん大切なものが外に出ていっちゃうんだよ」という言葉、そしてまた「外に出ていった僕と話しちゃうんだよ」という言葉に込められた洞察と卓見には思わず眼を見開かされる。同時に、実にこの二つの言明こそは、アラカワの「建築的身体」の基本コンセプトになっていることに気づかないわけにはゆかない。この「重力を破る」（すなわち「バランスを崩す」）という行為は、分離・結合するプラクシスであるあの「切り閉じ」（cleaving）にほかならない。すなわちこの場面において、「<私>から離れた<私>は一方で<私>と結びつく」のである。この<私>こそ、アラカワ、ギンズの言う「人」（“person”）、つまり、生命を「有機体-人」（“organism that persons”、<人>となってゆく有機体）として織り上げ、それを「トランスヒューマン」な存在へとつないでゆくプロセスの駆動力たる（一人称的な通常の“私”を超えた実体としての）「人」（“person”）であろう。重力とは、この場合、単に物理的な力のみならず、知覚システムを支配している重力、意味システムを支配している重力までも含まれる。われわ

れのひとりひとりを、言うところの「私」という「箱」に閉じ込めているのも、これらの重力にほかならない。アラカワ、ギンズの言う「人」という体験を通し、「私」なる存在は、「箱」であることをやめて「通路」になる。そのプロセスが自己なるものを別の存在へと組み直してゆくのである。

2. 述語論理

このように、アラカワの「私」および世界とその関係は、西洋のエピステーメとは異なっている。そこでは動作主は、もはや主語（主体）ではなくして、述語である。そのプロセスにおいて、主語は述語のなかに「没して」しまう。言い換えるならば、主語（主体）は、場（環境）に身体化されることによってはじめて自らを現動化するのである。このような思考様式は「述語論理」と呼ばれ、日本の哲学者の西田幾多郎によって展開された（フレーゲに先立つとされる）。この述語論理の思考は、アラカワの建築的身体のベースともなっている。

述語論理とは、異なった二つのものが、述語（場）を共有することによって、すなわち述語（場）の同一性によって、同じのものであるとみなされ、新たな合体物をつくるプロセスである。たとえば、Aはバクテリアを食べる、Bはバクテリアを食べる、よってA=Bである、というように。そしてAとBとは一体化して新たな実体をつくりはじめる。あらゆる存在は、それ自身の場を持つわけであり、述語論理においては、個体は場の成分となっている。一方、主語論理においては、主語が異なった二つのものを結合させる。その結合は、異なった二つのものが共通の主語を持つことによって、すなわち主語の同一性によって行なわれる。たとえば、私は青である、また、私は緑である、よって青=緑である、というように。この論理においては、二つの色の違いは主語（主体）にとっては存在しない。主語である私は、両者と同じものとして捉えるのである。この論理は、個体が周囲の環境を自身の世界へと変えてしまう振舞いを導いているものであると言える。

あらゆる生き物はこれら二つの論理を活用して生きている。たとえば、日本の地球生理学者の森山茂によれば⁴⁾、二つの論理は、生き物の性行動の基礎ともなっている。すなわち、生き物のオスとメスは場を共有することによって（述語論理によって）出会い、彼ら自身（彼らの「私」）を融合させ、新しい個体をつくり出す。しかし同時にこうした行為は、主語論理を通して周囲の世界を自らの世界へと変えてゆくプロセスでもある。

もうひとつ述語論理の例を引いてみる。すなわち真核生物（細胞内に核を持つ生物）の誕生である。これは生命の進化における最も重要な出来事であり、したがって、述語論理の最も感動的な事例となっている。それは今では「細胞内共生説」（アメリカの女性微生物学者リン・マーギュリスが理論化）として知られており、その理論によれば、人間の細胞の起源である真核生物は、原核生物（ミトコンドリアなど細胞内に核を持たない生物）が、他の原核生物を捕食することに失敗し、その結果生じた原核生物相互の「共生」を通して生まれたというものである。換言するならば、原核生物は、相互に共生することによって、すなわち場を共有し、新たな共通の環境を形成することによって、新たな生命を創造したわけであって（下線部、大平）、突然変異とか自然淘汰とかの主語論理にもとづいた生命進化とは別の原理がそこに働いていたので

ある。であるならば、それらの原核生物が「手続き的知」を通して作り出した共生の場あるいは環境こそは、「有機体-人」にとって最初の「建築的身体」の経験ではなかったか。

主語論理、述語論理は、近代の詩学にも適用できる。メタファーや象徴など表象的な詩法は主語論理に基礎を持つ。だが1870年代から1920年代にかけて大きな変化が生まれる。すなわち、ロートレアモンの「ミシンと蝙蝠傘が手術台の上で不意に出会ったように美しい」という有名な詩句に代表されるように、相互に異質な言葉同士の自然発生的にして創造的な結合から生まれる斬新な表現の登場である。こうした表現においては、書いている者の主観性を突き破って、言葉相互が一挙に同時に降り立つことによって、それまで存在していなかった新たな場をつくり出す。つまり場を共有することによって、新たな現実がそこに形成されるわけである。このように、新しく登場したこの詩学にあっては、創造の主導役は、書き手-主語(主体)から、場-述語へとシフトする。ランボアの「<私>とはひとつの他者である」という言葉、あるいはマラルメの「私という主体は死んだ」という言葉は、まさにこうした変化に対応している。ニーチェの「神は死んだ」という有名な言明は、西洋においては神(一神教の神)が近代の数百年にわたって西洋の思考の究極の主語であったことを考えるならば、主語論理の限界を明確に意識化したものにほかならない。この時期から、述語論理を本来的なベースとするアニミズム的ないしは多神教的な文化圏の表現であるジャポニスムやプリミティブ・アートが西洋にどっと流入してゆくのは、文明のこうした転換点に対応するものである。

文明のこのような世界的な地殻変動のもとで、西田は、仏教および禅の思想を吸収し、ギリシャ哲学、西洋近代哲学を摂取して、「場の哲学」(「述語論理の哲学」)と呼ぶことのできる独創的な思想を展開した。

我々が働くといふことは、物を身体的に構成して行くことである。[……] 身体的限定そのものが、既に非連続の連続の世界の自己限定、表現的世界の自己限定から成立するのである。身体的限定の極限に於て、世界が自己の身体となると考えへられると共に自己が自己自身を失ふ。かゝる絶対の否定の肯定に於て、物を見るといふことが成立するのである。故に物を見るといふことは、自己が世界の中に没することである、自己がなくなることである、同時にそこから自己が生まれることである⁵⁾。

こうした記述を読むと、西田の思考がアラカワの建築的身体の思考と深い親和性があることに気づく。だが影響関係はこの場合問題ではない。重要な点は、主語論理あるいは精神と身体のカルト的切断に対するオルターナティブと言うべき新たな論理、新たな思考が、西洋ではない国の哲学者である西田によって切り拓かれたということであり、そして今現在そうした思想が、日本の芸術家であるアラカワとアメリカの詩人のギンズとのコラボレーションによって、西洋的思考の枠組みを脱してゆく構造のもとで、すなわち、もはや西洋中心的でもなくまた単に東洋的でもなく、言葉本来の意味において「世界的な」もっとユニバーサルな構造のもとで、「有機体-人」として構築され、身体化されつつあるということである。

ところで、日本語には、英語の「body」に対応する語がいくつかある。主に用いられるのは二つあって、1) 生身のからだの物理的外延あるいは生理的組織体としては「肉体」が対応し、2)

それに対して「身体」は、運動生理的、神経的、精神的な諸機能の統合的有機的な働きの担い手（ドゥルーズ的な意味における「強度」、「内包」）として使用される。英語では「肉体」も「身体」も同一の「body」であるが、日本語では使い分けられる。アラカワも西田も、（英語で表記される）「body」を常に「身体」の意味において用いていることに深く留意されたい。日本語の「身体」と英語の「body」の最も大きな違いは、「身体」が、物理的、肉体的、生理的な働きとともに、精神的な働きを本来的な属性として持つということである。要するに、身体と精神は一つなのであって、日本人は（おそらくアジア人は）暗黙知としてそう悟っており、西洋的な身体と精神の分離とは対照的なこの考え方が、西田やアラカワのような根源的な刷新者によって理論化され、確かな形として「身体化」されるに至ったのである。さらに言えば、アラカワが高く評価する日本の現代の哲学者市川浩が述べるように、物質的なものも、生体的なものも、精神的なものも、身体を通して一体のものへと統合されていることを考えれば、むしろ身体こそが精神を立ち上げ、現働化していると捉えるべきだろう。

3. 生命は外在する

では、アラカワにとって身体とは何であるのか。もちろん、それは生身のからだそれ自体ではない。そのことを理解するためには、彼の初期作品に遡ってみるのが有益である。すると、アラカワにとって身体とは静態的な生理体などではなく、ふと拡大し始め、彼自身の存在からはみ出ていってしまう何やら得体の知れぬ実体であることを、われわれは身をもって知る。彼の内部では（おそらく幼少の時代から）、身体の奥から発散してくる謎めいた力と、「生命」と呼ばれるそうした現象を透視し尽くそうとする強靱な意志とが、星雲のように渦巻いている。最も初期の作品（1960年）——それぞれ棺桶のような木箱に納められていたことから「棺桶シリーズ」と呼ばれる——においてすでに、いかに彼が怪物的な未知の何ものかに憑かれているかが雄弁に語られている。不気味に成型されたそれらのセメント作品は、生命の別の様態を追い求め、それを今あるものよりもはるかに生氣ある有機体へと具現しようとするアラカワのオブセッションを、衝撃的なまでに生々しく伝えるものであった。次の「ボトムレス（底なし）」と題された作品群（1963-1964年、平面作品と立体作品の二つのシリーズからなる）では、それはもう少し方向性を持った形で示される。「ボトムレス（底なし）」とは、われわれの存在は——そうと自覚されていないが——閉じた実体ではなく、「未知の血液」（アラカワ）、未知の生命へとつながるべく、底部において開いていることを表わす。立体作品のそれぞれには、意味深くも、「SOCIOUS/ 魂の共同体」、「Communal Body/ 共身体」という副題が付いている。要約するならば、アラカワにとって身体とは外延ではなく強度であり、それは彼の「私」という内部にとどまっていることなく、濃密な非人称の場として彼自身から溢れ出てしまう実体であった。

では、われわれは、そうした「身体性 bodiness」あるいは「共身体/Communal Body」をどのように獲得し、その「強度」をわれわれの生の営みにどのように身体化してゆくのか。「重心を崩すことによって」——それがアラカワとギンズの綱領である。なぜならば、重心を崩すことによって、すなわち日常的な均衡を破ることによって、重力の力圧のためにわれわれの内部の無数の箱の中に閉じ込められ惰性的な眠りを眠っているあらゆるものを、われわれは再び

開かざるを得ないからである。アラカワとギンズの建築作品の地盤や床が傾斜しているのはそのためであり、一言で言えば、バランスを崩すことによって、われわれは与えられた大気とは別の大気を呼吸し始める（呼吸し始めざるを得ない）のである。こうした場、すなわち「遍在の場」にひとたび置かれるや、われわれは「永遠のヴァージン」になる。主語論理は舞台から退き、代わって述語論理がそれを主宰する。この遍在の場においては、ドイツの詩人ノヴァーリスが「すべての見えるものは見えないものにさわっている。聞こえるものは、聞こえないものにさわっている。感じられるものは、感じられないものにさわっている。おそらく、考えられるものは、考えられないものにさわっているであろう」⁶⁾とまさしく語るように、「見えないもの、聞こえないもの、感じられないもの、考えられないもの」は、今や「見えるもの、聞こえるもの、感じられるもの、考えられるもの」と——潜在的にではなく現実に——つながる。それら相互の間には「通路」が形成され、われわれは、箱としての個体的（固体的）な存在を脱け出て、流体的な存在となる。そうであるならば、そうしたバランス崩しの構造によってわれわれを絶えざる知覚の切り直しへと導く建築的環境をつくり出してやれば、われわれは、われわれの有機体をトランスヒューマンな存在へと組み直してゆくことが可能ではないか。まさにそれがアラカワとギンズがめざしていることである。「作られた側（構築物）が、作った我々の側を変えてゆく、そういった装置」⁷⁾を構築すること、それがかれらの建築思想にほかならない。それはまた、「作られたものは作るものを作るべく作られたのである」⁸⁾とする西田に思想と照応する。

アラカワとギンズの建築的身体とは、したがって、まさに原核生物が真核生物を生み出したように、人間がトランスヒューマンな存在へと自らを開いてゆく絶えざるプロセスの謂である。コペルニクスの転換と呼ぶことも可能なアラカワとギンズの最大の発見は、建築的身体あるいは有機体 - 人として、「生命は外在する」ことを見出したことである。あるいはむしろ、二人は、生命体は人間も含めて生命をそれぞれの個体の内部に有しているという主語論理に基づいた慣習的な考え方から、われわれを解き放ったと言ってもよい。そうした主語論理の思想から、ダーウィニズムや近代生物学（還元主義科学）が形成されてきたわけだ。この点については、アラカワ本人が建築的身体について講演を行なったある生命科学国際会議（2001年、パイロイト）でのひとりの分子遺伝学者の発言が非常に意味深い。その発言についてのアラカワの紹介によれば⁹⁾、当該の学者は、最先端の分子生物学でさえ、目覚ましいほどの技術的進歩にもかかわらず、生命の本質については実は大したことはわかっていないことを知り、アラカワの講演を聴いて驚くとともに、文明の大きな転換のようなものを感じたということである。

「生命は外在する」というテーゼが奇妙に聞こえるとすれば、それはわれわれが主語論理で生命を生きているからである。思考と文化が述語論理に基づく人々にとっては、そのテーゼは、明確な形で述べられることはないが、彼らの暗黙知の土台となっている。たとえばル・クレジオは、パナマの原住民が夜のしじまの中で奏でる葦笛のリズムが宇宙とひとつに溶け合っている場面に心を奪われて、アラカワの表現とまるで同じように「頭脳は外部にある」¹⁰⁾と語る。またラフカディオ・ハーンは日本の農民の生命観について触れ、「その百姓たちは、個人の心や精神というものは」——「すべての人間の心は一つである」から——「その人が生きている間も、同時にたくさんの場所に存在することができる」¹¹⁾と考えていることを、文中の人物の言葉を

通して伝えている。しかしながら、近年、科学の様々な分野で、実に大きな意味をはらんだある変化が生まれつつある。それは、主語論理と還元主義に基づいた科学から、述語論理と手続き知に基づいた科学への変容である。日本の優れた哲学者の河野哲也は、「心は身体と環境との関係性のなかで成立するという意味においては、まさしく<身体の外にある>と言えよう」¹²⁾ (<>による強調、原著者)と述べる。また、世界的に活躍する認知科学者の下條信輔も、同じような見方に立ってこう語る。「意識のもっとも意識らしい頂点の部分において、心は、無意識の領域へ、そして生理、身体、世界へと際限なく漏れ出すのです」¹³⁾。

生命が外在するということは、個々の人間は、正確には「有機体 - 人」と呼ばれるべき生命の構成成分であるということを意味する。個々人は皆その「人としての有機体」につながるべくおのれの「人」を生きているのであり、個々人の建築的身体が、「われわれという共身体」として、すなわち「I-identityではなく We-identity」として、その「人としての有機体」を構築してゆくのである。もし、個々の「人」(あるいは個々の「人」のある部分)が、世界のつくり手であるその「人としての有機体」の中に身体化されれば、個々人の身体は消え去っても、彼あるいは彼女の「人」は、永遠のプロセスのもとにある「有機体 - 人」の一要素として生き続けるわけである。これが、「われわれは死なないことを決心した」というアラカワとギンズのマニフェストの言わんとしていることにほかならない。

4. 建築は、一人によってではなく、すべての人によってつくられねばならない

アラカワとギンズのもうひとつの偉大な発見は、「生命は建築として在る」、すなわち建築は、われわれが住む建物を建てる「アルス」であるよりもむしろ「生命の形式」であるというものである。建築はわれわれの身体にとって、「第二の、第三の、第四の、必要とあれば(ずっと続いて行って)、第九の皮膚」¹⁴⁾となるべきなのだ。したがって、ロートレアモンの「詩は、一人によってではなく、すべての人によってつくられねばならない」とい有名な言葉に倣って、「建築は、一人によってではなく、すべての人によってつくられねばならない」と言うべきだろう。そしてそれは、「生命は間接的にのみ証明され得る。間接的とは手続き的の謂である」¹⁵⁾とアラカワとギンズが適確にも述べるように、主語論理、還元主義によってではなく、述語論理、手続き知によってなされねばならない。では、生命はどのように自らの生命を「間接的」に生きているのであるか。そのプロセスは、生命とは何であるかを直接的に(物質現象的に)知ることを通してではなく、「予知」を身体化することを通して、環境が提起する問題をそうして解くことを通して、展開してゆくのである。ドゥルーズが指摘するように、生命は「光の問題を解くこと」によって、眼という器官をつくり出したのだ。つまり、理論的方法によってではなく「手続き的な予知」によって、生命は自らを生成してゆく。「知覚するかもしれないと感じているもの」、それが「世界という織物」¹⁶⁾の本来的なつくり手なのである。

「予知」は、いつも、外から、前方から、未来の方から、やって来る。日本の生命学者、清水博によれば、(フィードバックではなく)「フィードフォワード」の能力、すなわち「すぐ先の未来の状況の現在への回帰」¹⁷⁾こそが、生命を導いている軸であるという。機械(たとえばミサイル)は次の操作を予測あるいは計算はするが、未来の状況を全体として予期することはない。

予知あるいは予期こそ、生命に特有のものである。アラカワとギンズが次のように語るのも、こうした文脈に基づく。

建築的身体の仮説あるいは場所化された予知の仮説

予知を通して身体に由来するものは、予知に属するものと捉えられねばならない。人が、あるもの X が存在すると考える場所は、どのような場所であれ、予知が寄与している一区分であるとみなされるべきである¹⁸⁾。

この X を身体化することとは、予知あるいは予期によって、その X につながってゆく「通路」をつくることにほかならない。それは、与えられたものとしてある時間や空間とは別の時空をつくり出すことである。芸術という営みがそうであるように、生命は「時空を彫刻する」のであって、そのことを通して自らの生を更新してゆくのである。そしてまた、われわれは生命を DNA-たんぱく質系に限定する必要はない。アラカワとギンズは、建築的身体が、DNA-たんぱく質系を拡張した次のステップの生命、すなわちトランスヒューマンな生命と呼ばれるべき「超生命」へ向かう扉を開けるものと考えている（それが可能であると想定している）。それこそ、アラカワとギンズのプロジェクトが目標としているものである。

* 第3回 荒川修作 + マドリン・ギンズ 国際会議提出論文日本語版 [原文は英語]。

注

- 1) 宮沢賢治『春と修羅』序より。『宮沢賢治全集 I』, ちくま文庫, 筑摩書房, 2008 (1986) 年, 15 頁。
- 2) 2005 年 4 月 25 日放映「課外授業 ようこそ先輩」。
- 3) 深沢慶太「<不可逆>の人, 荒川修作」, 荒川修作ほか『三鷹天命反転住宅 ヘレン・ケラーのために 荒川修作 + マドリン・ギンズの死に抗する建築』, 水声社, 2008 年, 92 頁。
- 4) 述語論理, 主語論理については, 氏の著作『自己創成するガイア——生命と地球は共生によって進化する』(学習研究社, 1997 年)に多くを負っている。この場を借りて感謝申し上げる。
- 5) 西田幾多郎『西田幾多郎全集 第八巻』, 岩波書店, 1979 (1948) 年, 165 頁。
- 6) Novalis: *Schriften*. Bd.2. herausgegeben von Richard Samuel in Zusammenarbeit mit Hans-Joachim Mahl und Gerhard Schulz. Kohlhammer, Stuttgart, 1981, p.650.
- 7) 南川三治郎「死なないために、身を捧げる荒川修作」, 『芸術新潮』, 1991 年 4 月, 120 頁。
- 8) 西田幾多郎, 上掲書, 548 頁。
- 9) 『現代思想』, 2002 年 3 月号, 9 ~ 11 頁。
- 10) ル・クレジオ (高山鉄男訳)『悪魔祓い』, 新潮社, 1975 年, 60 頁。
- 11) 平川祐弘編『世界の中のラフカディオ・ハーン』, 河出書房新社, 1994 年, 204 頁。
- 12) 河野哲也『〈心〉はからだの外にある——「エコロジカルな私」の哲学』, NHKブックス, 2006 年, 229 頁。
- 13) 下條信輔『意識』とは何だろうか——脳の来歴, 知覚の錯誤』, 講談社, 1999 年, 216 頁。
- 14) Madeline Gins and Arakawa: *Architectural Body*. The University of Alabama Press, Tuscaloosa and London, 2002, p.xv.

- 15) Madeline Gins and Arakawa: *Making Dying Illegal—Architecture Against Death: Original to the 21st Century*. Roof Books, New York, 2006, p.166.
- 16) Arakawa and Madeline Gins: *Architecture: Sites of Reversible Destiny (Architectural Experiments After Auschwitz-Hiroshima)*. Academy Editions, London, 1995. 邦訳、荒川修作・マドリン・ギンズ『建築——宿命反転の場 アウシュヴィッツ - 広島以降の建築的実験』, 工藤順一・塚本明子訳, 水声社, 1995年, 19頁, 49頁 (若干改訳)。
- 17) 清水博『生命知としての場の論理』, 中公新書, 中央公論新社, 2006 (1996)年, 254頁。
- 18) Madeline Gins and Arakawa: *Making Dying Illegal—Architecture Against Death: Original to the 21st Century*. Op.cit., p.195.